

7-7 能登半島地震の周辺活断層への影響

Stress changes on some active faults caused by the 2007 Noto Hanto earthquake

産業技術総合研究所

Geological Survey of Japan, AIST

計算条件

【震源断層】

震央 北緯 37.22° 東経 136.685°

Mw = 6.7 (長さ 15km, 幅 15km, 走向 58°
傾斜 60° レイク 117°, すべり 1.8m)

【受け手側断層】

走向 58° 傾斜 60° レイク 117°, 深さ
10km

地震分布は防災科研 Hi-net 自動解による 3
月 25 日 18:00 までの余震.

【主要活断層への応力変化】

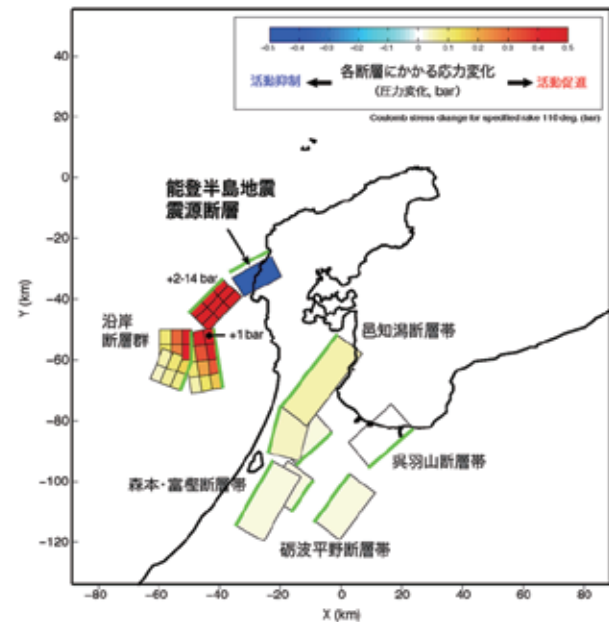
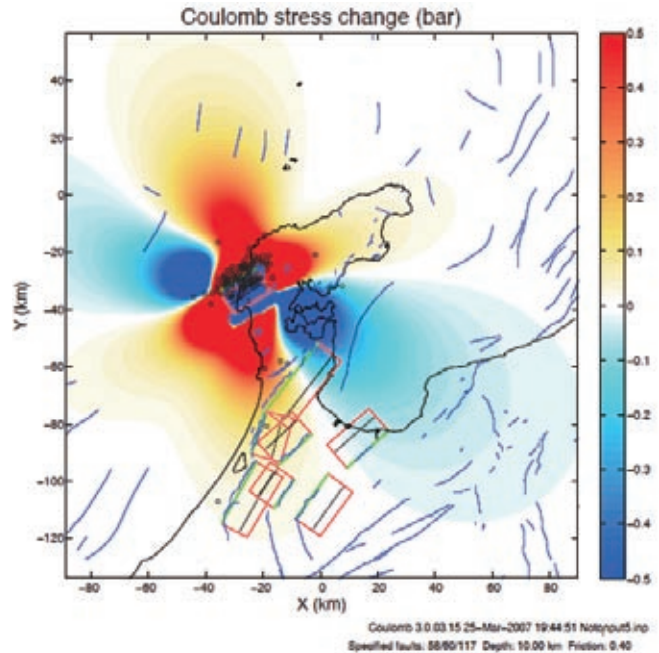
以下の活断層が、今回の震源と同様のメカニ
ズムを持つと仮定すると、邑知潟の東側の断
層（石動山断層）： ごくわずかに減少
邑知潟の西側の断層（眉丈山断層）： ごく
わずかに増加

森本・富樫断層： ほぼ変化無し

呉羽山断層帯： ごくわずかに減少

砺波平野断層帯： ほぼ変化無し

能登半島の確実度の低い短い活断層群： 半
島北部顕著に増加，七尾湾周辺は顕著に減少
(遠田晋次)



第1図 (上) 能登半島地震による ΔCFF の分布. (下) 主要活断層への影響. 断層は地表から深さ 15km まで延びていると仮定し, その地表投影を示した. 傾斜は震源断層とその西延長は 60°. その他は 55° とした. 緑線は各断層の地表での位置を示す.

Fig.1 (Upper panel) Coulomb stress changes (ΔCFF) due to the 2007 Noto Hanto earthquake. (Lower panel) ΔCFF on the major active faults.